令和4年11月1日発行　毎月1回1日発行　ボランティア情報　昭和52年11月12日第三種郵便物承認

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

ボランティア情報

2022 11月号 no.546

福祉教育わたしの実践

愛媛県　宇和島市社会福祉協議会　地域福祉課　主事　小林（こばやし） 綾子（あやこ）さん

【福祉教育で、子どもたちが困っている人に声をかける勇気を育む】

宇和島市社会福祉協議会（以下、市社協）は、主に小学校や中学校で、年間70講座ほど、多い年では100講座以上の福祉教育を実施しています。児童や生徒と障害当事者、社会福祉施設の職員や保育士、助産師など、地域の多様な講師たちとの交流をメインに行っています。

福祉教育の実践において常に課題となっているのが「貧困な福祉観」です。小林さんは「『福祉は自分たちとは違う、かわいそうな人たちのためのもの』という福祉観を払拭するために試行錯誤しています」と話します。

そんな小林さんが、福祉教育を行ううえで意識していることの一つが「人と人としての出会いの場」づくりです。「『障害者』や『高齢者』ではなく、一人の人間同士として出会える場にすることが大切だと思います」と小林さんは語ります。具体的に、障害者のふだんの生活での工夫や得意なことなどのストレングス（強み）が伝わるようにしています。例えば、聴覚障害者が講師の時には、ジェスチャーや口話など、手話以外でもコミュニケーションをとれること、車いす利用者が講師の時には、一緒に車いすスポーツを楽しむなど、障害に対する固定観念を覆すような交流を心がけています。

また、小林さんが福祉教育のキーパーソンとしてあげるのが、学校の先生です。市社協に寄せられる先生からの依頼は「例年通りで」というものもありますが、小林さんは「深くお聞きすると、多くの先生が福祉教育で達成したい目標をもっています」と指摘します。そうした先生の思いを引き出すため、小林さんは市社協、講師、先生の三者での「事前打ち合わせ」を重視しています。総合的な学習のカリキュラムや学校行事の予定をもとに当該年度のプログラムを話し合うと同時に、市社協で発行している「福祉学習パンフレット」を持参し、さまざまな取り組みも提案します。

こうして打ち合わせを重ねると、「国語の授業で習った点字を活かし交流をしたいので、講師は、昨年の聴覚障害者の方ではなく、視覚障害者の方にしたい」と先生からの提案もあるそうです。小林さんは、福祉教育を「子どもたちが、ふだんのくらしで困っている人に声をかけられる勇気をもてるような『種まき』」と語ります。

多くの人の心にやさしさの花が開くよう、これからも実践を続けます。

宇和島市社協福祉教育パンフレットは
こちらからダウンロードできます
https://www.uwajima-shakyo.or.jp/local/fukushi-gakusyu.html

Contents

P.2▶ 特集 中・高校生ボランティアが社協ボラセンを盛り上げる！ ～中・高校生による、地域のためのボランティア活動の今～
P.6▶ 実録ボランティアコーディネーター
P.7▶ 必見！ ファシリテーションを学ぼう！
P.8▶ 発災とともに駆けつけ、協働で支援し、被災者に寄り添う

ふれあいネットワーク
社会福祉法人 全国社会福祉協議会

特集

中・高校生ボランティアが社協ボラセンを盛り上げる！

～中・高校生による、地域のためのボランティア活動の今～

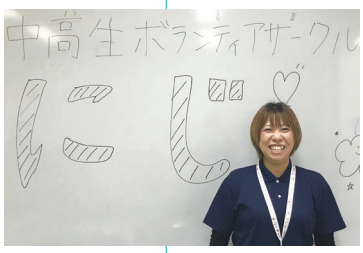
これまで社協ボラセンでは、福祉課題をかかえる世帯の子どもの居場所づくりや学習支援ボランティア等の育成を支援してきました。そして、これまで「支援の受け手」としてとらえられてきた中・高校生が、主体的に参画するボランティア活動が各地で見受けられています。

今回の特集では、社協ボラセンがいかに中・高校生の参画を促し、地域のボランティア活動をともに盛り上げてきたのか、そしてボランティアに参画する中・高校生の声を紹介します。

事例1

中・高校生の継続的なボランティア活動を市社協がサポート。活動をさまざまな気づきや経験を得る機会にするとともに、一人ひとりが輝ける場となることをめざす

山形県・南陽市社会福祉協議会



小川さん

南陽市は、赤湯温泉や熊野大社、「鶴の恩返し」伝説、近年ではスカイスポーツなど、豊かな観光資源に恵まれた土地です。新幹線や国道が通っているためアクセスもよく、県南地方の要衝の地となっています。

南陽市社会福祉協議会（以下、市社協）では、小学生ボランティアサークル「ぼらんてぃあひろば『ぴよっこ』」、中・高校生ボランティアサークル「にじ」など、子どもたちによるボランティア活動の支援を充実させています。今回は、市社協の担当者と、中・高校生のメンバーにお話をお聞きしました。

南陽市社会福祉協議会　総務係　事業推進員　小川（おがわ） 真実（まみ）さん

「地域のために」と、高校生の自発的な提案で発足

中・高校生ボランティアサークル「にじ」（以下、にじ）が発足したのは、1999年のことです。当時、南陽市から県立山辺高校の福祉科や看護科に通う高校生3人が「授業で学んでいる知識と技術を活かして、自分たちが暮らす地域のために貢献したい」と、市社協を訪れたのがきっかけです。3人の高校生は、同じ志をもつほかの仲間にも声をかけ、計7人で活動をスタートさせました。団体名の「にじ」には、「雨上がりの空にかかる虹のように町を明るくしたい」「7人が、7色に輝く虹のように地域で輝けるように」との思いが込められています。

「ぴよっこ」との交流会。「ぴよっこ」OB が「にじ」に加入するケースも多い

「にじ」としての最初の活動は、市内の高齢者施設を訪問し、入所者との交流を深めることでした。そこから徐々に活動の幅が広がり、中・高校生のメンバーも増えていったのです。現在、「にじ」に在籍するメンバーは31人で、活動内容は、高齢者施設への訪問に加え、地域や施設の環境整備、乳幼児施設での交流や窓ふき、車いすの掃除、街頭での募金活動、災害時を想定した非常食作り、雪かきなど多岐にわたります。

さらに、小学生からの「もっと福祉を知りたい」との声がきっかけで2001年に発足した、小学生ボランティア

災害時に備え、熱に強いポリ袋を使った非常食の作り方を学ぶ「にじ」のメンバー

助成金情報

（公財）三菱財団「2023年度社会福祉事業・研究助成」（2023年1月19日締切）

法人・団体による、社会福祉を目的とし、社会的意義があり、他のモデルとなることが期待できる民間の事業や活動への助成。
（詳細は「三菱財団　社会福祉助成」で検索）

サークル「ぼらんてぃあひろば『ぴよっこ』」（以下、ぴよっこ）との定期的な交流も行っています。小川さんは「この交流会で『にじ』のお姉さんやお兄さんに憧れた『ぴよっこ』のメンバーが、中学生になって「にじ」に加入してくれることも多いんです」とうれしそうに語ります。

存続の危機に直面するも、地道な募集で活動を継続

実は小川さん自身も中学2年生から5年間、「にじ」に在籍していました。高校の3年間は、小川さんよりも年上のメンバーが不在となったため、代表も務めたそうです。小川さんは当時について「メンバーも地域の方も、皆で笑顔になれるような活動をしたいとの思いがありました」と振り返ります。「活動のなかでさまざまな人と出会い、『ありがとう』と言われるとほっこりした気持ちになれてうれしかったです」と笑顔を見せます。

そして、2016年4月に市社協に入職した小川さんは、3か月後に「にじ」の担当を任されます。年月を経て改めて「にじ」に携わることに感慨もひとしおの小川さんでしたが、ちょうどその頃、「にじ」は在籍するメンバー数が1人だけという、存続の危機を迎えていました。「とにかく人を集めなければと思い、チラシを作りました。その際、特に『ぴよっこ』のOBの目に留まることを意識し、中学校の全生徒に配布させていただきました。さらに、高校の各クラスと、駅の掲示板にも掲示しました」（小川さん）。

チラシには、すぐにでも「メンバー募集」とうたいたいところでしたが、「なじみのない生徒にはハードルが高いかもしれない」と考えた小川さんは、まず「体験会」への参加を呼びかけました。なかなかすぐに効果は表れませんでしたが、「にじ」を存続させたいとの強い思いで粘り強く体験会を続けるうちに、少しずつメンバーが増えていきました。毎年3月には「ぴよっこ」のOBに手紙を出すなど地道な募集を続けた結果、ようやくここ2～3年でメンバーが二桁台になってきたのです。

「にじ」のメンバーによる花壇の除草作業の様子。地域や施設の環境整備も定期的に行う

中・高校生ボランティア団体のサポートで大切なこととは

小川さんは、「にじ」の活動をサポートするうえで大切にしていることについて、次のように語ります。「メンバーによって得意なことも苦手なことも違うなかで、一人ひとりが輝ける場をどうつくっていくのかを、常に考えています。どんどん地域に出てもらい、多様な人とふれあうなかで、たくさんの気づきや経験を得てもらいたいですね」。

地域には中・高校生の活動を求めている人々が数多く存在し、活動によって地域が元気になっていくことを、小川さんは社協職員になって改めて実感したといいます。「にじ」を卒業した中・高校生が、いつか地域の担い手として活躍してくれることを願いつつ、中・高校生に寄り添う伴走支援を続けます。

「にじ」の中・高校生に聞きました

【Q】南陽市はどんな町ですか？

渡部来美さん：人がとてもあたたかい町です。隣の家の人に食べきれなかった野菜をお裾分けしたり、ちょっとした物の貸し借りができる信頼関係があります。サクランボの季節になると直売所の方が「もってけ」と言って袋いっぱいにくれたりします。

【Q】「にじ」に参加したきっかけは？

青木ひなたさん：中学2年の時、小川さんの紹介で「にじ」の存在を知りました。「ぴよっこ」でも活動していましたが、「にじ」は、自分たちで企画を考え、一からアクションを起こすことができると聞き、活動してみたいと思いました。

紺野麗さん：「ぴよっこ」で活動していた小学4年の時に、「にじ」のメンバーの人から「一緒に活動しましょう」と声をかけてもらったのがうれしかったからです。

【Q】印象に残った出来事は？

朝倉愛子さん：隣町の、私たちと同じような活動をするボランティアサークルの高校生と交流したことです。私たちが取り組んでいない活動を知ることができて、発見や学びになりました。

前列左から、朝倉さん、菅野さん、青木さん、橋本さん
後列左から、渡部さん、土屋さん、武田さん、紺野さん

【Q】活動のなかで出会った印象的な人物は？

菅野あずみさん：市社協の小川さんです。人を思いやることができて包容力もある方です。自分のためよりも人のために行動できる方でもあります。私たちにさまざまな経験をさせてくれます。将来は、小川さんのような仕事をしたいと思っています。

【Q】今後、取り組みたいボランティア活動は？

土屋響さん：保育園や老人ホームを訪問していろいろな人と交流したいです。自分の考え方の幅を広げることにもつながると思います。

橋本結さん：「ぴよっこ」の活動で老人ホームを訪問した時、高齢者と折り紙やけん玉をしたのが楽しかったので、また行きたいです。

武田昌子さん：災害ボランティアをしたいです。東日本大震災のことをテレビで知って、自分も役に立てたらいいなと思いました。

助成金情報

（公財）公益推進協会「コロナに負けるな！ 浅井スクスク基金」（2022年12月20日締切）

コロナ禍において文化的・精神的な支援を目的とした「文化・芸術・スポーツ」分野における新たな取り組みを行おうとしている非営利団体への助成。（詳細は「浅井スクスク基金」で検索）

事例2

福祉を学ぶ高校生が講師となり、高齢者や小学生を対象とした介護講座を実施。地域住民と関わることで、高校生たちも多くの学びを得る

佐賀県・みやき町社会福祉協議会

左から、原さん、栗山さん、相森さん、西田さん

北部九州の中央に位置するみやき町は、なだらかな丘陵地帯と田園地帯を特徴とする土地でありながら、佐賀県の中核都市である鳥栖市や福岡県久留米市に隣接していることから、暮らしやすい環境に恵まれています。

みやき町社会福祉協議会（以下、町社協）は、佐賀県立神埼清明高校で福祉を学ぶ高校生が、さまざまなボランティア活動で中心的役割を果たし、地域住民と多世代で交流する機会を作り出しています。そのなかで、学校と町社協がどのように連携し、高校生の活動をサポートしているのか伺いました。

みやき町社会福祉協議会　地域づくり課　課長　西田（にしだ） 雄一郎（ゆういちろう）さん

佐賀県立神埼清明高校　教諭（福祉担当）　原（はら） 慶介（けいすけ）さん　3年生　相森（あいもり） 翔太（しょうた）さん／栗山（くりやま） 裕紀（ゆき）さん

高校生が講師となり介護教室を実施

町社協と神埼清明高校の連携による数々のボランティア事業は、2019年からスタートしました。高校生がコミュニティ食堂の運営スタッフとして参加したことから始まり、多文化共生事業「せかいのわ」、ウクライナ人道救援金活動へと、活動の輪が広がってきています。現在、これらの事業は高校生が起点となって、小中学生や高齢者などの多世代が交流する機会にもなっています。

2019年10月に行われた「高校生から学ぶ介護講座」では、同校で福祉や介護について学んでいる2年生21名が講師となり、男性在宅介護者に向けて車いすの使い方や入浴介助、排泄介助の方法などを実演しました。退職した男性は地域との関わりが薄く、在宅介護を一人で背負ってしまう傾向があるため、介護技術を学ぶとともに地域とつながりをもつきっかけになればと企画されたものです。講演後には高校生が参加者に手紙を送るなど、介護技術を教えるだけではない、心の交流も続いています。

男性介護者教室で移乗や入浴について説明。高校生による新しい取り組みとして話題に

町社協の西田さんは高校生による活動について「高校生から技術を教えてもらえれば、地域の人も高校生のことを知る機会になり、お互いに理解が深まると考えました」と語ります。そのように関わることで「高校生にも、みやき町の人たちはあたたかいなと感じてもらいたい」という意図もあったそうです。

講座前には、高校生が説明役と参加者役に分かれてデモンストレーションを行い、参加者が知りたいことは何か、どうすれば正しく伝えられるかを考え、繰り返し練習したそうです。生徒の指導を行う原先生は、この取り組みについて「こうして練習したからこそ本番でうまくでき、参加者からも感謝してもらえます。その結果、生徒たちの自己肯定感を高めることにつながり、もっと勉強しよう、努力しようと思える好循環が生まれています」と語ります。

高校生の姿を見て小学生もボランティアに関心

高校生を講師とした介護講座は、その後も対象を広げて展開していきました。2021年7月の民生委員研修会は、高校生が民生委員に向けて介護実技講座を行うとともに、民生委員・児童委員が、民生委員信条朗読や民生委員の歌、活動内容を紹介するという双方向のかたちで行われました。民生委員と直接会話をすることは、介護福祉士や理学療法士などをめざす高校生にとって、地元の現状や地域福祉を知るための有意義な経験となったようです。

2022年9月には、生徒たちが地域の小学校を訪ね、小学生を対象とした車いす体験の講師を務めました。この企画はもともと小学校から町社協に依頼されたものでしたが、西田

民生委員・児童委員に向けた介護実技講座は、高校生たちにとって地域福祉を学ぶ場に

助成金情報

（公財）洲崎福祉財団「令和4年度継続助成（第4回）」（2022年12月24日締切）

中長期的視点において、より多くの障害児・者の QOL向上、社会課題の解決に寄与する事業への助成。（詳細は「洲崎福祉財団　助成」で検索）

さんが高校生の起用を提案したそうです。「せっかくだから高校生を講師にしてみてはどうかと小学校に打診したところ、小学校側からもぜひと言われて実現しました」と、西田さんは経緯を説明します。

車いす体験は4年生の3クラスに対し、それぞれ3時間という長時間にわたり行われましたが、そのかいもあり、ボランティア活動に興味をもった小学生から「あの高校に行きたい」といううれしい声も聞かれました。

原先生は、このような企画が町社協の提案であったことの重要性を強調します。「小学校と高校が直接やりとりをすることも可能ですが、学校同士の取り組みだと単なる教育活動になってしまいます。地域共生社会の実現のためには、町社協を含む三者が一緒に活動することが理想です。それにより小学生や高校生も社協の存在を意識するようになりますし、地域の活動として取り組めます」と語ります。

学校で学べないことを地域のなかで学ぶ

ボランティア活動を経験すると、生徒たちは一層の努力ができるようになると、原先生は評価しています。「何もしなければ成長はありません。しかし、ボランティア活動を通して、人と話すことが苦手だった生徒が、地域のお年寄りと話せたとか、小学生に大切なことをうまく伝えられたとか、小さな成功体験を積むことで、自信をつけて成長していきます。近年はコロナ禍で実習ができなかったので、なおさらありがたい機会になっています」(原先生)。

小学校で車いす体験教室の講師を務める。わかりやすい言葉で伝える工夫をした

原先生は、高校生によるボランティア活動を「学校ではできない学びの場」だといいます。「教科書はいつでも読めますし、わからないことがあればスマホで調べることができます。しかし、地域の人と話して楽しいと思える体験はその時にしかできませんし、生徒もそのほうが楽しいはずです」(原先生)。

ボランティア活動の主体はあくまでも高校生自身です。大人が引率することも可能ですが、町社協の職員や高校の先生は伴走者として彼らをサポートすることに徹しています。原先生も「伴走するうえで意識しているのは生徒の『巣立ち』です」と語り、保護しすぎず、自立できるよう促しています。

すべての地域活動が福祉教育につながる

高校生をはじめ小中学生も対象とし、数々の事業を進めている町社協ですが、西田さんは「福祉教育」という言葉を積極的に使おうとしません。そこには「こちらから教えるものではなく、あらゆる地域活動のなかに学びの機会があり、さまざまな気づきがある」という思いがあるからです。

高校生の活動についても「参加」ではなく、企画段階から一緒に作り上げていく「参画」と表現してきました。受け身で終わらせず、自ら地域のなかに入り、一人でも多くの人とつながりをもってほしいと考えています。「町の人にあたたかく接してもらえたという経験があると、自分の町が好きになりますし、人と接する時の自らの態度にもつながるでしょう」(西田さん)。

今後は、ボランティア活動を通じて地域の一員としての意識を育んだ高校生が起点となり、次世代につなげていくことを期待しています。

神埼清明高校の高校生に聞きました

【Q】これまでみやき町で参加したボランティア活動は？

相森翔太さん：多文化共生事業「せかいのわ」でジャマイカ出身の人と交流したほか、ウクライナ人道救援金活動に参加しました。

栗山裕紀さん：ウクライナ人道救援金活動と、『人生フルーツ』という映画を見てから居場所について一緒に考えるワールドカフェに参加しました。

【Q】参加したきっかけは？

相森さん：高校の先輩が「ボランティア活動は経験にもなるし、成長につながるよ」と勧めてくれたので。

栗山さん：将来のために視野を広げたいと思って、いろいろな人と話せるワールドカフェに参加しました。

【Q】印象的だったことは？

相森さん：ウクライナ支援の活動でご一緒した町社協の方が、高齢者の気持ちに寄り添った対応をしているのを見て、私も細かな気配りできるようになりたいと思いました。

映画を鑑賞した後、10～70代の多世代で居場所について語り合い、共有した

栗山さん：映画を見た後、さまざまな世代の方とグループディスカッションをした際、同じグループの高齢者の方が、私とは見ているところや感じ方が違っていて、すごくすてきだと思いました。

【Q】将来の目標は？

相森さん：高齢者の自立生活のためのリハビリテーションを行う理学療法士になりたいと思っています。

栗山さん：看護師になりたいので、学校や活動で学んだことを将来に活かしたいと思います。

助成金情報

(公財)タチバナ財団「2022年度　障がい者支援団体への助成」(2022年12月25日締切)

障がい者の社会参加と自立を促進し、障がい者の福祉の向上に貢献すると見込まれる活動を行う団体への助成。活動実施施設が一都十県(茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、新潟、山梨、長野、静岡)にある団体に限る。(詳細は「For Children 基金」で検索)

実録 ボランティアコーディネーター

ボランティアセンターのコーディネーターは、今、どのようにボランティアの皆さんや地域と連携・協働し、まちを暮らしやすくする活動に取り組んでいるのでしょうか。
ボランティアセンターを支える「人」に焦点を当て、ボランティアセンターの役割を考えます。

地域福祉課　サテライト
ボランティアコーディネーター
水口（みずくち）　良幸（よしゆき）さん

第8回　成果が見えやすく、笑顔が増えることが仕事の魅力

富山県　南砺市社会福祉協議会

社協紹介

南砺市：人口48,312人（2022.4.1）
富山県の南西部に位置し、面積の約8割を森林が占める。市北部の平野部には民家が点在する「散居村」が広がる。南砺市社会福祉協議会（以下、市社協）は、2004年に行われた4町4村の合併に伴い、新たに生まれた社協です。ボランティアセンターにはセンター長1人、ボランティアコーディネーター4人が配置されています。
注）散居村…広大な耕地の中に民家が散らばって点在する集落形態

Q ボランティアセンター(以下、VC)に配属されてどのくらいですか？

A 入職した2011年に配属され、生活困窮者自立支援事業や他の事業担当を経て、昨年からVCに戻りました。担当は今年で通算5年目になります。現在、主に福祉教育と傾聴ボランティア団体の活動支援に取り組んでいます。

Q 市社協のVCの特色を教えてください。

A ボランティアコーディネーターが、私を含め4人配置されていることです。全体の統括、施設ボランティアのサポート、教職員向けの研修会など主となる事業を分担し、コーディネートなどの日常業務は皆で取り組んでいます。

また、業務のなかで相談したいことが生じたらその都度ミーティングを開くのですが、私たちはそれを「ボラコ集会」と呼んでいます。業務上の悩み相談や事業の進め方について、自由な発想で話し合っています。1人だけで考えるのは大変ですから、ボラコ集会でざっくばらんに話し合える環境は非常にありがたいと感じています。

Q 取り組んでいる事業のなかで、印象的な出来事は？

A 今年の夏、小学6年生の総合的な学習の時間で車いす利用者を講師として招いた時のことです。講師の話を聞いて興味をもった子どもたちから、自発的に「校内を1日車いすで生活してみたい」との希望が出たのです。そこで9月から、日直になった子どもは体育の授業以外、登校してから下校まで1日のすべてを車いすで生活することになりました。先生からは、車いすで移動する際、周りの子どもが介助するなど、自然とたすけあいが生まれていると聞いています。全員が校内での車いす生活を体験した後は、校外学習として車いすでの外出を体験し、現在は地域の「安心・安全マップづくり」に取り組んでいるところです。子どもたちの前向きな姿勢が本当に素晴らしいと感じています。

車いすでの外出を体験し、マップづくりに取り組む子どもたち

Q コーディネートの魅力ややりがいは何ですか？

A 社協の仕事は、困りごとに対応しても相談者が笑顔になることばかりではありません。しかし、ボランティア活動は関わった人が自然と笑顔になる機会が多いと思うのです。これはボランティアコーディネーターの魅力の一つだと感じています。また、取り組みに対して成果が見えやすいことは、やりがいにつながっています。例えば福祉教育では、子どもの笑顔や感想などを見ると、こちらの伝えたいことが伝わったと分かるので、うれしくなりますね。

Q 社協の仲間たちにメッセージをお願いします

A ボランティアは、無理なく続けられる活動であることが前提です。そして「この人だからできる活動」ではなく、「誰もができる活動」として広がることが大切だと思います。ですから、それを支援する私たちも、1人でかかえ込んだり無理をしたりせず、相談相手を見つけ、継続性を意識しながら取り組んでいくのがよいと思います。

水口さんへのひとこと

水口さんは、話しやすい雰囲気とともに、高い観察力をそなえたボランティアコーディネーターです。学生時代に陸上競歩で厳しい練習を積まれた経験が、彼の安心感とやさしさにつながっているように感じます。今後も、着実に前進していかれるでしょう。僕も後ろからついていきます（笑）。

社会福祉法人　富山県社会福祉協議会
富山県ボランティアセンター　主事
前田　悠登さん

事例集紹介

住民参加型在宅福祉サービス団体全国連絡会「コロナ禍における住民参加型在宅福祉サービスとネットワーク活動事例集等」
全国10か所の団体の事例をまとめた事例集。2022年7月発行。ホームページからダウンロード可能。（詳細は「住民参加型　事例集」で検索）

必見！ファシリテーションを学ぼう！

話し合いの場づくりに重要な役割を担うファシリテーションのノウハウを、1年間かけて学びます。社協職員やボランティアコーディネーターのみなさん、一緒に学び、実践に活かしていきましょう。

ファシリテーションの力が、地域を、ボランティアを元気にする！

第8回 いよいよ本番 場をあたためよう の巻

子どもの頃、ボランティア活動を通してワークショップと出合う。人事労務コンサルタント会社を経て独立。現在、ひとりひとりが「尊重され、存在できる」場づくりをめざして福祉をはじめさまざまな分野で会議やワークショップを進行。また、その手法と考え方「ファシリテーション」を伝える研修を企画・実施している。

特定非営利活動法人
日本ファシリテーション協会
フェロー **鈴木 まり子**さん

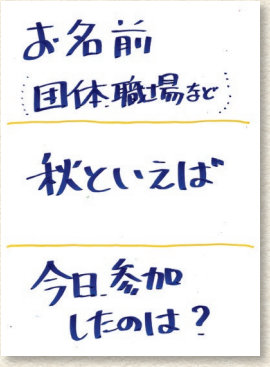
1 「アイスブレイク」で話しやすい雰囲気づくり

参加者が「今日はリラックスしているな」「今日はちょっと話をしてみようかな」と思えるような場づくりもファシリテーターの大事な役割です。緊張した雰囲気を溶かし、話しやすい雰囲気をつくることを「アイスブレイク」と呼びます。アイスブレイクには、ゲーム的な自己紹介や体を動かすものなど多くの種類があります。ぜひ、目的に合わせて色々なアイスブレイクを試してみましょう。青木将幸さん著「アイスブレイクベスト50　リラックスと集中を一瞬でつくる　ほんの森出版」がお勧めです。ただし「今からアイスブレイクをしましょう」と言うと、その言葉を知らいない参加者は、かえって不安になる可能性があるので「はじめての方もいますので自己紹介の時間です」など分かりやすい言葉で伝えます。アイスブレイクというと何か特別なことをしなければと思いがちですが、やさしい笑顔で参加者を迎える、不安そうな参加者に声をかける、音楽をかける、お茶やお菓子を用意する、季節の花を飾る、など広くアイスブレイクをとらえましょう。

アイスブレイク

2 いつでも、誰とでもできるチェックイン

いつものメンバーでの話し合いでお勧めなのは「チェックイン」です。ホテルに泊まるときにチェックインするように、全員が「一人一言」の時間をつくります。参加者は会議が始まる時に椅子に座ってはいますが、心ここにあらずということも多々あります。まずはチェックインから始めることで「よし、始めるぞ」という気持ちが生まれます。会議の冒頭で一度口を開くと、その後も発言しやすくなる効果もあります。話す内容は、近況や今日期待していること、最近嬉しかったことなど、その日の参加者に合ったお題を用意しましょう。参加者によっては話が終わらなくなることがあるので、時間管理には気をつけます。参加者が多い時には、グループをいくつかに分けて行います。自己紹介ではないので、職場やサークルなど、いつものメンバーでも毎回行うことができます。チェックインはファシリテーターにとっても参加者の状態や期待していることが分かり、それに合わせて内容や進め方を変更することもできるという効果があります。



チェックン紙芝居（秋といえば）

3 ネガティブチェックイン

チェックインは楽しい雰囲気づくりだけではない、と実感したのは2016年の熊本地震でした。熊本県嘉島町役場で全課の課長が出席する会議の進行をすることになり、チェックインをしました。「お名前と簡単な近況をお話ください」という私の投げかけに、最初の人が「私の家は半壊でした」と発言。次の人は「私の家は無事でした。だから役場に来ているみなさんと顔を合わせるのが辛いです。」次の人は「私も半壊です。でも、家のことは家族に任せたままです」と涙をこぼしました。チェックインが終わるころ、静かな雰囲気の中にも「ここにいる全員が辛い思いをしているんだ」という一体感が生まれ、議題に入ると積極的に課題解決に向かう発言が出ました。災害時の会議では「その件は自分の課ではない」と課と課が役割を押し付け合うこともしばしばあります。チェックインがチームづくりにも役立つこと、一見ネガティブに感じる発言が安心な場をつくることを学んだ体験でした。ぜひ、みなさんも職場で、ボランティア活動の場で、チェックインを取り入れてみてくださいね。

書籍紹介

『月刊福祉』2022年12月号（全社協出版部）価格1,068円（本体971円）

特集は、「コロナと福祉――コロナ禍の3年で見えたこと」。コロナ禍で顕在化した課題に対し、試行錯誤のなかで福祉はどう対応し、変わってきたのかについて確認する。（詳細は「福祉の本出版目録」で検索）

ボランティア情報
2022 no 546
全国ボランティア・市民活動振興センター
社会福祉法人 全国社会福祉協議会

発災とともに駆けつけ、協働で支援し、被災者に寄り添う
～災害ボランティア・NPOの先達紹介～

各地で災害が発災した際、いち早く被災地に駆けつけ、災害ボランティアセンターや社協と連携・協働を進め、被災者への支援を行うボランティア・NPOの活動を紹介します。

第8回

一般社団法人 ピースボート災害支援センター（PBV）

ホームページ：https://pbv.or.jp　Facebook：https://www.facebook.com/PBVsaigai

小林 深吾（こばやし しんご）　理事／プログラムオフィサー
臨床心理士／公認心理師。2003年より国際NGOピースボートの船内運営・企画に携わる。2011年、東日本大震災では、発災直後から先遣隊の一人として宮城県石巻市に入り、主に行政や自衛隊、社会福祉協議会、各NPO・NGO団体との渉外業務を担う。その後も現地責任者として長期的な復興支援活動を実施

いつ、どこで、どんな災害にあったとしても いち早く駆けつけ、必要な支援を届ける

地球一周クルーズ旅行で知られる「国際NGOピースボート」は、1995年の阪神・淡路大震災の災害支援活動に始まり、世界中のネットワークを活かして世界各国の災害支援にも携わってきました。しかし、2011年に起きた東日本大震災で先遣チームを派遣した際には、大規模な被害を目の当たりにし、被災地のニーズに対応しながら継続的な支援の必要性を痛感しました。緊急期から復興期まで災害派遣に対応できる体制づくりを行ったことをきっかけに、「ピースボート災害支援センター」(以下、PBV) が設立されました。

設立後も、日本各地で起きた地震や水害、土砂崩れ、豪雪などの被災地の支援活動を続けてきました。災害の規模や種類により活動内容は異なりますが、まずは被災地へ先遣スタッフを派遣し、現地ニーズ・状況・条件などを調査したうえで、必要な支援のかたち（人材・物資・資金・ノウハウなど）を検討し、被災地に合った支援を届けています。職員やボランティアを送り出すなかで気をつけているのは、被災地に負担をかけないことです。平時から「災害ボランティア・トレーニング」(専門的スキルを学ぶのではなく、一般の方ができることを学びます) で、現地での支援のイメージ、被災地での心構えや注意点を学ぶことでボランティアの力を引き出します。

令和4年（3月）福島県沖地震では、宮城県山元町社協から支援要請を受け、地元の支援団体「一般社団法人OPEN JAPAN」(本誌2022年4月号で紹介) 等の団体と連携し、屋根補修の支援を行いました。被災地の社協・行政・NPO等と情報共有を図り、被災者が取り残されないよう支援活動に取り組みました。

また、令和4年（9月）台風15号では、静岡県内にPBVスタッフを5名先遣派遣し、地元の災害VC等の関係機関や各支援団体と連携し、静岡市葵区・清水区にて住民の方より被災状況とニーズをうかがい、物資支援、炊き出し支援、被災家屋の清掃・応急対応、地域での支援拠点設置にあたっています。

被災地の社協や行政との 連携・協働で大切にしていること

大規模な災害になるとさまざまな外部支援者が活動します。その時、多くの団体が一斉に被災地の災害VCに行っても、地元社協が調整する負担が大きくなってしまいます。そうした災害VCに寄り添いながら、それぞれの外部支援団体の動きの共有や地元社協との連携をスムーズに図れるよう連絡・調整の部分に協力をしています。

また、被災地の地元団体ともしっかりと連携を図りながら、地元団体に災害やその後の復興に向き合ってもらえるネットワークをつくることが大切だと考えています。地元団体の主体性を大切にしながら、人の派遣やノウハウを伝えたり、協力者の紹介などを行ったりしています。

令和4年8月3日からの大雨での新潟県村上市・関川村災害VCの運営支援

令和4年台風15号で床下に潜り消毒を行う

地域支援拠点「にこにこカフェ」で被災した方々と交流をし、被災者のよき相談役になったり、支援物資を届けています（令和4年台風15号）

最近の主な災害対応	令和4年台風15号（2022年）、令和4年8月3日からの大雨（2022年）、令和4年ウクライナ支援活動（2022年）、令和4年福島県沖地震（2022年）、令和3年8月豪雨（2021年）、令和2年福祉県沖地震（2021年）、ベトナム中部洪水被害（2020年）、モーリシャス重油流出事件（2020年）、台風19号（2019年）、モザンビーク サイクロン・イダイ（2019年）、北海道胆振東部地震（2018年）、西日本豪雨（2018年）、グアテマラ フエゴ火山噴火（2018年）ほか

〒100-8980 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル TEL.03-3581-4656 FAX.03-3581-7858
E-mail vc00000@shakyo.or.jp URL https://www.zcwvc.net/
発行人●松島 紀由 編集人●高橋 良太 制作●株式会社トライ 定価●¥110（税込）※購読料は会費に含む